富山県　大島町

八　塚　C　遺　跡

－民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告－

1998年8月

大島町教育委員会

序

この報告書は分譲宅地造成事業に伴い、大島町教育委員会が平成９年度に実施した八塚Ｃ遺跡の発掘調査報告書であります。

調査の結果、八塚Ｃ遺跡は中世の掘立柱建物や井戸などの遺構の他、火舎や懸仏といった社寺に関連をもつ遺物が出土しました。町史によると戦国時代この地には念仏道場のようなお堂が存在していたという伝承もあり今後の調査による期待が膨らみます。

本報告書は十分ではありませんが、今後の調査研究を進める上での参考資料にしていただくとともに、埋蔵文化財に対する理解ならびに保護の一助となれば幸いに思います。

終わりに、調査にご援助並びにご協力頂きました株式会社高岡地所・地元住民の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に心から感謝申し上げます。

平成10年８月

大島町教育委員会

教育長　大　井　富　雄

例　　言

1　本書は、民間分譲宅地造成事業に先立ち実施した、富山県射水郡大島町八塚地内に所在する八塚（やつづか）C遺跡の発掘調査報告である。

2　調査は、株式会社高岡地所に委託を受けて、大島町教育委員会が実施した。調査に当たっては富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受け指導と協力を得た。

3　調査事務局は大島町教育委員会事務局生涯学習係に置き、主事田中　明が調査事務を担当し、事務局長草野信正が総括した。

4　調査期間・面積・参加者は以下のとおりである。

調 査 期 間　平成９年６月３日～同年12月４日（延べ108日間）

調 査 面 積　１０，５００㎡

調査担当者　大島町教育委員会　　生涯学習係　主　事　田中　　明

同　上　　嘱　託　大友喜代子

富山県埋蔵文化財センター　調　査　課　主　任　島田　修一

5　資料の整理は、富山県埋蔵文化財センター職員の助言・指導を得て、調査担当者が行った。

なお、本書の作成にあたって、編集は主として島田があたり、執筆は調査担当者が分担して行った。個々の文責は文末に記したとおりである。

6　現地調査ならびに資料整理にあたって、下記の方々からご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

岸本雅敏・宮田進一・神保孝造・斎藤　隆・高梨清志・境　洋子・新中洋子・江幡幸子（順不同・敬称略）

また、出土した懸仏について京都国立博物館の久保智康氏より、製作年代など様々な御教示を得た。

7　現地調査にあたっては、社団法人大島町・新湊市シルバー人材センターの協力を得た。また、株式会社高岡地所・イカリ建工株式会社から作業員・調査事務所・重機・調査器材等について多大なご協力を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。

8　本書の挿図・写真図版に用いた方位は磁北、標高は海抜高である。なお、遺構の表記にあたっては略号を用いた。使用した略号は下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＫ：土抗、ＳＤ：溝・河川、ＳＥ：井戸、ＳＸ：不明遺構、Ｐ：柱穴

9　本書で用いた土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（1996年版）に準拠している。

10　出土品ならびに記録資料は、大島町教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経緯 …… 2

Ⅲ　調査の概要

1　調査の方法と経過 …… 2

2　立　地 …… 4

3　層　序 …… 4

4　遺　構 …… 4

5　遺　物 …… 13

Ⅳ　まとめ …… 15

1　懸仏について …… 15

2　調査の所見 …… 16

引用・参考文献 …… 16

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1

第２図　調査区の位置と区割図 …… 3

第３図　遺構配置図・遺構断面図 …… 7

第４図　遺構配置図・遺構断面図 …… 9

第５図　遺構実測図 …… 11

第６図　遺構実測図 …… 12

第７図　遺物実測図 …… 13

第８図　遺物実測図 …… 14

写真図版

Ⅰ　遺跡の位置と環境

大島町は富山県の西部域に位置し、庄川の右岸に広がる沖積低地である射水平野にその町域を形成する。東は小杉町に接し、西は庄川に沿って高岡市に相対し、北は新湊市、南は大門町にそれぞれ隣接している。この沖積低地は約6,000年前（縄文時代前期）には、今は富山新港となっている方生津潟が射水丘陵の山際まで広がる湖底であった。その後気候の寒冷化に伴い、庄川・和田川・神楽川・下条川・鍛冶川などの諸河川によって土砂が運ばれ、それが堆積して次第に陸地化し、あちこちに沼地が残る湿地帯となっていった。現在の大島町は全体に平坦な土地が広がり、標高は高いところで約８ｍ、低いところで約３ｍを測る。

八塚Ｃ遺跡は大島町八塚地内、大島町南西部の大門町境に接したところに所在する。標高７ｍ前後に立地する中世後期（15～16世紀）の集落遺跡である。調査区付近の旧小字名は「中寺家（なかじけ）」、「東寺家（ひがしじけ）」、「表熊屋敷（おもてくまやしき）」と呼ばれ、「昔、ここに山伏の住む大きな寺があった。上杉謙信の兵火で消失した」という伝承も残っている。さらに、八塚地内の東部域では、古代・中世集落の存在を裏付ける土師器（杯・高坏・壺など）や須恵器（壺・甕など）、珠洲焼などが発

1．八塚Ｃ遺跡　2．八塚Ａ遺跡　3．八塚Ｂ遺跡　4．八塚土田遺跡　5．小林遺跡　6．小林南遺跡　7．北高木遺跡　8．南高木遺跡
9．中野遺跡　10．中野北遺跡　11．若杉遺跡　12．小島遺跡　13．鳥取遺跡　14．新開発遺跡　15．赤井遺跡　16．熊野神社遺跡
17．二口油免遺跡　18．二口五反田遺跡　19．二口遺跡　20．本江畑田Ⅰ遺跡　21．本江大坪Ⅰ遺跡　22．棚田遺跡　23．安吉遺跡
24．安吉Ⅱ遺跡　25．本田天水遺跡　26．本田杉田遺跡　27．水上・本開発遺跡　28．二口西遺跡　29．高木・荒畑遺跡　30．沖塚原東Ａ遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

見されている。

また、周辺地域に目を転ずれば、本遺跡の立地する平野部や射水丘陵をはじめとする丘陵地は、下図に示したとおり遺跡の密集地となっており、特に平野部では弥生時代から中世の遺跡が主体をなしている。なかでも大島町域では、新湊市高木と大島町北高木の2市町にまたがり、縄文時代（後期・晩期）・弥生時代（中期～後期）・古代・中世に及ぶ複合遺跡である高木・荒畑遺跡や、この荒畑遺跡と一体の遺跡であり、大量の墨書土器をはじめ出挙制度に関わる記載が認められる木簡、版木状木製品（奈良・平安時代）、鋳造遺構・鋳型（中世後期）などが発見され注目を集めた北高木遺跡、現在、町道建設に先立って発掘調査が進められている小林遺跡などが広く知られている。（大友）

Ⅱ　調査の経緯

平成7年8月、大島町教育委員会は民間の不動産業者から、分譲住宅団地造成を目的とした大島町八塚地内の農振農用地からの除外申請を提出するに際して、埋蔵文化財包蔵地の有無、その取り扱いについて照会を受けた。これに対し町教育委員会は、今後の対応につき富山県埋蔵文化財センターと協議を図り、当該申請地が周知の遺跡である八塚C遺跡の隣接地であることから、事業計画地約29,500㎡を対象とした分布調査を実施することとなった。

平成7年12月、町教育委員会は県埋蔵文化財センターの協力を得て分布調査を実施した。調査の結果、対象地の荒蕪から遺物は散発的に採集されたに過ぎなかったが、地形や地元の伝承を鑑み、当該地の北東に隣接する八塚C遺跡がさらに南側、事業計画地のほぼ全域に広がるものとして捉えられた。この結果をもとに、関係者間で再度協議を行い、遺跡の範囲及び遺存状況等の確認を目的とした試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、平成8年6月に実施した。途中、調査後の埋戻し措置をめぐって事業者側と調整がつかず、一時中断等の紆余曲折を経たものの、同月末には調査を終了した。調査の結果、事業地の約6割を占める約18,500㎡において中世後期段階に帰属するとみられる遺構・遺物が確認されたため、調査結果を事業者に説明するとともに、遺跡の保護措置について関係機関と協議を重ねた。協議は、事業の性格上から計画変更による現状保存は困難であり、記録保存を前提とした発掘調査を実施する方向で進んだ。これに伴い町教育委員会では、発掘調査の計画策定を進めたが、調査範囲や調査費用の負担方法をめぐって事業者側との調整が困難を極め、膠着状態が続いた。平成9年度に入り、今年度は約 9,000㎡を対象として本調査を実施することで、ようやく事業者との協議が合意に達し、早急に調査の事前準備を行うとともに県埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼して、6月初旬から発掘調査に着手することとなった。（島田）

Ⅲ　調査の概要

1　調査の方法と経過

調査は、掘削残土の処理問題や費用的な制約から、対象地全域を同時に調査することは困難であった。よって、任意にA～C地区の3ブロックに分割して順次調査を進めることとし、6月3日、A地区（東側区域：第3図Y90区以東）から調査を開始した。まず、調査員立ち会いのもとに重機による表土除去を行い、その後、対象地の地形・区画にあわせて10m間隔に測量基準杭を打設し、2m×2mを一区画とするグリッドを設定した。続いて、人力による遺構検出作業の後、個々の遺構ごとに掘削・記録作業を行った。また遺構検出・掘削の終了した区域から順次、簡易遣り方測量によって1／20で遺構の平面図化を進めた。さらに、全景写真撮影・平面図化終了後、補足作業として人力で完掘できなかった井戸・用水等を重機により断割り、最終レベル・湧水面等の確認・記録を行った。以後、同様の手法によりB地区、C地区へと調査を進め、12月4日には全体の調査を完了した。

なお、当初の調査対象面積は約 9,000㎡を計画していたが、B地区終了時点で、予測以上に遺構・遺物の密度が散

第2図　調査区の位置と区割図（1／2,000）

漫であったことが反映して工程的に若干の余裕が生じた。このため、事業者側と協議の上、次年度調査の軽減化を考慮してC地区北東側を約 1,500㎡拡張して調査を実施した。よって最終的な発掘面積は10,500㎡である。

2 立 地

調査対象地は、和田川とその支流によって形成された微高地の東側縁辺部に位置している。現況は、標高 6.5m前後を測る休耕田・畑地であり、耕地整理等の地形改変によって均平化され全体的に平坦な地形を呈する。しかし、一帯の地山化した土層の堆積状況から、旧地形でもその傾向は変わらないものの、北東から南西方向に緩やかに傾斜することが観察できる。また、対象地中央部と東端部には近世から利用されてきた二筋の用水（九ヶ用水・三ヶ用水）が北東方向に対象地を縦断して流れており、これらの攪乱を脱がれた区域でのみ中世後期の遺構が遺存していた。

3 層 序

今回の調査対象地は、著しく後生の攪乱を受け本来的な土層堆積を残していないことが、試掘結果から判明している。よって、試掘調査で確認された基本土層をもとに、今回の本調査で観察できた点を補足してその概要を記す。

対象地一帯は、本質的に庄川等の諸河川の活動による氾濫堆積土で構成されることから、基本的に水平な堆積状況にある。その層序は概ね8層に区分でき、1層：褐灰色シルト（15～20cm）、2層：褐色～暗褐色シルト（5～10cm）、3層：灰黄色シルト(15～20cm)、4層：黒色粘質シルト（10～20cm）、5層：灰褐色粘質シルト（10～30cm）、6層：灰色～緑灰色砂・シルトの互層（40～50cm）、7層：灰色砂（15～30cm）と堆積し、8層灰色～オリーブ灰色粘質土へ続く。8層以下は、局所的にピート層を交えながら灰色砂・シルトが地表下3m以上まで互層堆積する。

各層の性格は、1層が表土・耕作土で、2層は中世後期の遺物包含層であり、且つ検出した遺構の主たる埋積土となっている。3層が中世後期の遺構検出面であり、本層以下が地山となる。なお、A地区南西部では上位に黄色の粗砂が堆積する。4層は腐植を多量に含むピート層であり、基本的に遺物の包含は認められない。7層は地下水を多量に含む湧水砂層である。なお、2層は試掘調査時に、事業計画地北東端部においてのみ堆積が確認されており、今回の調査対象地内では、遺構や旧用水の埋積土を除いて全く遺存していない。これは、昭和9年の洪水災害の際、流出した他地区の耕作土を補充するために対象地一帯の表土を50cm余り削土・搬出したことに起因するものと思われる。

また、この削土によりB地区中央部やC地区の北西部では3・4層すら削平され荒れた状況であったため、やむを得ず5層上面で検出した遺構も数多いが、断面観察ではいずれも形成面は2層中にあることが明らかであることから、これらも3層上面で検出した中世後期の遺構群と同時期として捉えた。

4 遺 構（第3～6図、写真図版1～3）

検出した遺構には、掘立柱建物2棟、土坑約 180基、井戸23基、溝・水路40条がある。いずれも基本的には3層上面で検出できるが、前項で触れたように、箇所によってはかつての削土の影響により本来の確認面さえも消失していることから、遺存状況は極めて不良である。遺物包含層であり主たる遺構覆土となる2層が調査地内に全く遺存しないにも拘わらず、遺構内では比較的厚い埋積状況にあることからも、大半の遺構は本来の構築形態・規模・深度を保持していないと推定される。また、その分布状況も、X63～70Y90～95区やX76～80Y85～89区でやや集中する感があるものの、全体的には散漫であり、各々の遺構間に有機的な繋がりを見出せるものも殆ど無い。

掘立柱建物（第5図、写真図版2の2・3の5・7）

A・B地区の中央部で、SB01・03の2棟を検出した。いずれも削平等により遺存状態は悪く、辛うじて桁行・梁行の柱列の一部分を検出できたに過ぎない。よって、その形態・規模など詳細は判然としないが、一応検出状態での概要を記す。なお、規模等は桁行（距離）×梁行（距離）で表し、桁行と想定できうる方向をもって建物の主軸とした。

SB-01 A地区中央部X64～66Y91～93区で検出した。確認できた桁行1列（P1－P5間）、梁行1列（P1－P3間）の柱列から、2間（5.4m）×2間（4.2m）以上の規模をもつと推定される。柱間は桁行2.8m＋2.6m、梁行

2.1m＋2.1mで、主軸方位はN－30°－Eである。柱穴の掘り方は径20～30cmの円形・楕円形で、検出面からの深さは15～30cmを測る。柱根は残存していないものの、P1やP3の覆土の堆積状態から柱痕跡が確認でき、φ10～15cmの柱材が想定される。また、柱穴からの出土遺物はない。

SB-03 B地区のX80～82Y87～88区で検出した。確認できた桁行（P1－P4間）、梁行（P4－P5間）の柱列では、3間（5.2m）×1間（1.8m）の規模であるが、実際は梁行方向にさらに広がることが容易に推定でき、SK172も梁間の柱穴の可能性がある。柱間は桁行1.7m＋1.7m＋1.8m・梁行1.8mである。主軸方位はN－48°－Eであり、SB01よりやや東に振れている。柱穴の掘り方は径30～35cmの円形・楕円形で、検出面からの深さは15～35cmを測る。SB01同様、柱根は残存していないが、P2～P4の覆土となっている①b・①c層の堆積状態から柱痕跡が確認でき、φ10～20cmの柱材の使用が想定できる。遺物は、P3から中世土師器皿が2点出土している。

また、周囲にはSE14・18・21・22といった4基の井戸が検出されたが、いずれの井戸がこの建物と関連する施設であるか不明である。ただ、少なくともSE21・22はこの建物の柱穴を切る位置に在ることから、より新しい時期の構築であると考えられる。またSK172がこの建物の柱穴と仮定すれば、SE18にも同様のことが言える。

なお、検出した上記2棟以外にも建物の存在を推定させる、明らかに柱穴と判断できる土坑が調査区内に点在する。特にSB01周辺に多く認められ、SK43・SK106・SK107・SK126・SK152等がそれに該当する。このうちSK43やSK106は、その位置関係からSB01に切り合う別棟の存在を想定させるが、周辺に対応する柱穴が確認できず判然としない。

以上、検出できた2棟の帰属時期については、互いに独立した位置関係にあり、SB01からは出土遺物もなく断定はできないが、近似した覆土の堆積状態からほぼ同時期に存在していたものと捉えている。

土　坑（第3～6図、写真図版3の6）

調査区のほぼ全域にわたって、約180基を数える土坑が散発的に検出された。遺物を伴うものは数少ないが、覆土の状態から、建物と同様に総じて同時期に帰属するものとして捉えた。形態的には円（長円）形・方形・不定形なものと様々であるが、規模的には概ね3類に区分できる。円形ないし長円形の土坑は、径20～30cmを測る小型の類と径1～1.5mの中型の類が大半を占める。これに対し、方形・不定形の土坑はSK56・63・78・176等のように、一辺3～5mを越える大型のものが多い傾向にある。以下、例を挙げて概要を記す。

SK-111　A地区X63Y91区でSB01に隣接して検出した。形態・規模は80×55cmの隅円方形を呈し、検出面からの深さは35cmを測る。西壁に接してφ10～15cmの円礫を2～3段積み上げた状態が確認された。一帯の地山には礫層は堆積していないことから、他所から搬入し意識的に構築したものと考えられ、柱材の根固的な用途が推定される。

SK-173　B地区X83Y86区で検出した。65×50cmの長円形を呈し、深さは60cmを測る。断面観察では、φ20cmの柱痕跡が確認でき、周囲に建物は検出していないが、掘立柱建物に伴う柱穴列の一部と考えられる。

SK-176　C地区南東部X97～100Y71・72区で検出した最も大型の土坑である。北西部をSD35に、南東部をSD37（旧三ヶ用水）に切られ正確な規模は不明だが、6.5m×5.5～6mの長円形を呈するものと推定される。検出面からの深さは約80cmを測り、他の大型土坑に比較して深い。掘削面は湧水砂層にまで達しており、常に満水状態にある。周囲に関連する遺構は認められず、用途・性格は全く不明である。遺物は中世土師器皿が1点のみ出土している。

以上、小型・中型の土坑は、総体的に検出面からの深さは浅く、覆土も褐色～暗褐色の単一層であるものが多い。よって、一部には木根などの攪乱もあるものと思われる。ただし、柱穴状の掘り方を示す例も数多く、それらは未確認の建物に関わると捉えたい。一方、大型の土坑は形態的には掘立柱建物に付属する、いわゆる竪穴状土坑〔河西1994〕に類似する。しかし、いずれも周囲には関連する建物は検出されておらず、その用途・機能は全く不明である。

井　戸（第3・4・6図、写真図版3の1～3）

A・B地区に点在して23基を検出した。B地区ではSB03周辺にまとまって認められたが、A地区では特に集中

するような箇所は無く、２～３基を一群として南東から北東にかけて分布する。いずれも削土や崩落によって上部構造を欠くが、形態的には円・楕円形の掘り方を持つ素掘井戸である。検出面からの深さは60cmから 1.7mと幅があり、調査区南東側で検出したSE01・03・11等は深く、北東に向かうにつれ総じて浅くなる。これは旧地形の傾斜により生じた湧水層（７層）に至るまでの深度差に加え、北東部よりで削土が地表深く及んだためと推定される。

いずれの井戸も覆土中・下層は黒色シルト・粘質土を主体とし、上層はかつて一帯に堆積していたと推定される２層を主とする暗褐色土によって覆われる。出土遺物が認められたのはSE01・02・07・18・19・21の６基のみで、量的にも、各々から土器片１点という状況で極めて少ない。土器類の他、SE07底面付近から曲物底部が１点出土している。

SE-03 Ａ地区Ｘ49Ｙ95区で検出した。上端部を径1.5mの不正円形に15cm程掘り込んだ後、やや西に偏して1.2mを円筒形に掘り抜く有段の掘り方を持つ。覆土は黒色シルト・粘質土を主体とする。出土遺物は認められない。

SE-11 Ｂ地区Ｘ50Ｙ83区で検出した。形状は径80cmの円形で、深さ1.2mの円筒形の掘り方を持つ。

SE-16・17 Ｂ地区Ｘ78Ｙ88・89区で検出した。SE16は径１m前後の不整円形を呈し、深さ90cmの擂鉢ないし漏斗状の掘り方を持つ。SE17は径80cmの円形で、掘り方は深さ60cmの漏斗状を呈する。検出区域では湧水層まで50cm前後と浅く、SE16は湧水層を掘り抜き、灰色粘質土まで掘り込まれていた。またSE17では投棄された円礫が認められた。

溝・水路（第３・４図、写真図版１・２・３の８）

全域にわたって40条余を検出した。これらは、SD02・04等のように南東から北西方向に流れるものと、SD01・26・35等といった南西から北東方向に流れるものに大別される。前者は幅30～50cm、深さ15～30cmと小規模であり、旧地籍図にみられる地割りに沿っているものが多い。このことから、一部に自然流路を含んだ、水田畦畔沿いの水路的な性格が考えられる。しかし、覆土の堆積土や、その堆積状況では他の遺構と大差はなく、時期的にも近世以降とは考え難いため詳細は明らかでない。

一方で後者は、全く地割りに合致するものが無く、規模的にも前者より総じて大きい。企画性を有するものも数条認められ、これらは、いわゆる区画溝としての機能を有すると推定される。

SD-01 Ａ地区南端から北東に縦走しＸ65Ｙ78区で不明瞭となる。幅0.8～1.3m、深さ10～30cmを測る。覆土下位は灰色・黄色砂で構成され、断面形態からも企画性は認められず自然流路と捉えた。弥生土器・珠洲片が混入している。

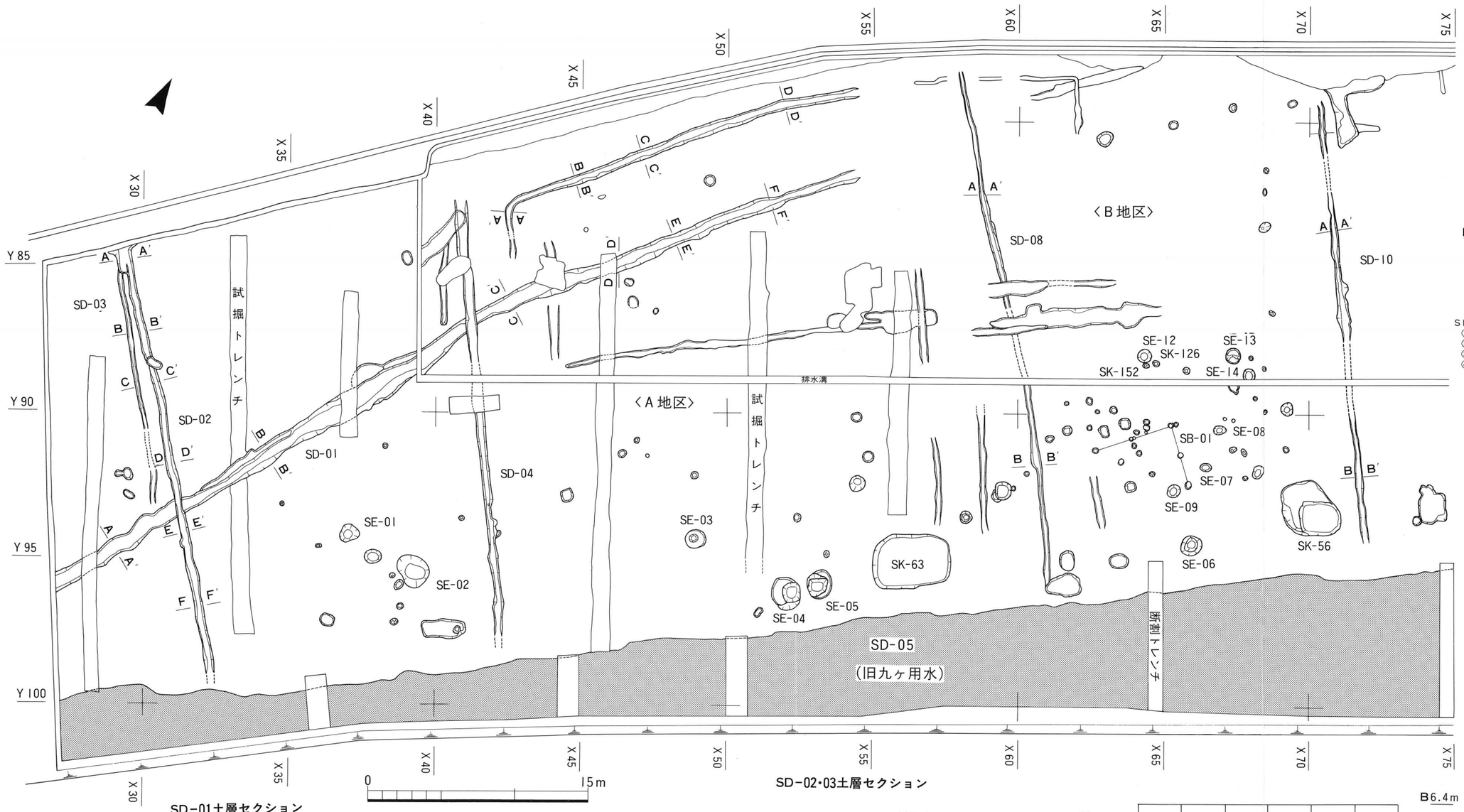
SD-11 Ｘ87ラインに平行して南東から北西に流れる。南東部では遺存状況が悪く幅0.8m、深さ10～20cm前後であるが、北西に向かうにつれ残りが良く幅1.3～1.8m、深さ30～40cmを測る。掘り込みは湧水砂層に達しているものの、覆土は下位まで黒色～オリーブ黒色シルト・粘質土が堆積しており、常に流水状態にあったものでは無いとみられる。Ｘ87Ｙ82区で当溝底面から鋳銅製の懸仏尊像が出土し注目されたが、この他には殆ど出土遺物は認められなかった。

SD-35 Ｃ地区でＸ70ラインに平行して検出された。幅0.7～1.2mで、深さは遺存状況不良な箇所を除いて、60cm前後を測る。方向は直線的で、断面形態も一律に逆台形状を呈し明らかに人為的構築と判断できた。試掘調査時の所見も含めて検討すると区画溝的な性格が想定できる。出土遺物は少なく古代土器片が若干混入する。

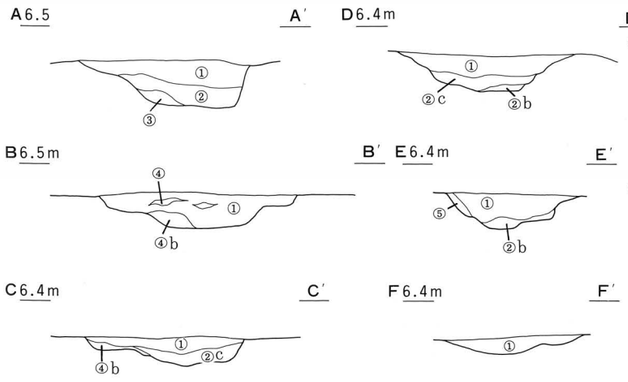
なお、当溝はその位置関係から調査区外で前述のSD11と繋がる可能性が高い。その場合、連結箇所はまさに当溝の屈曲角部に当たることから、より区画溝としての性格が明瞭となる。

SD-40 Ｃ地区の北東端部で検出された。南東から北西に流れＹ55ラインで北東に屈曲し調査区外へ延びる。同様に南西側へも10m程延びてＸ106ラインで途切れる。幅3.5～6.5m、深さ30cm前後を測り、深さに対して異様に幅広の溝である。両壁に沿うかたちで幅15～20cm、深さ10～15cmの側溝状の小溝が巡る特殊な形態を呈する。区画溝とも考えられるが、SD11・35等とはかなり異なった様相であり釈然としない。遺物の出土は認められなかった。

以上の他、SD12と繋がって検出されたSD26も、平面形態的には遺存状況の悪い区画溝とも捉えられるが、断面では明らかに流水作用が観察できることから、積極的には肯定できない。



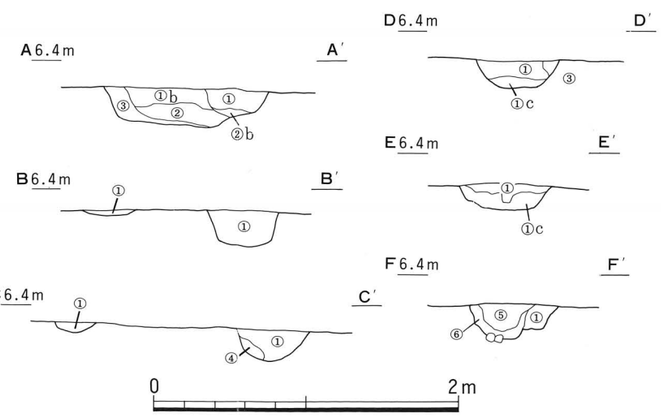
SD-01土層セクション

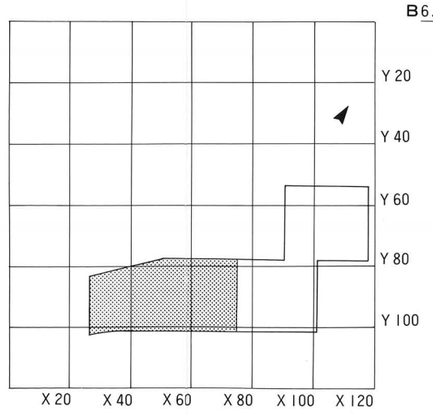


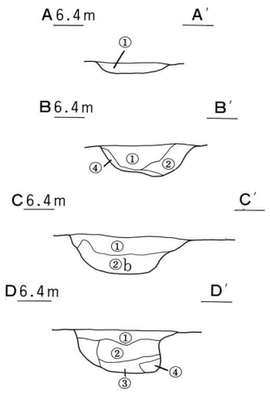
SD－０１土層セクション
①2.5Y3/2～5Y3/1黒褐色砂質土
②5Y5/1灰色砂
②b10YR4/1褐灰色砂
②c10YR4/1褐灰色～10YR4/2灰黄褐色砂質土
③10YR1.7/1黒色粘質土（腐植を多量に含む）
④2.5Y6/4にぶい黄色砂
④b2.5Y5/4黄褐色粗砂
⑤2.5Y5/3黄褐色砂質土

SD－０２・０３土層セクション
①10YR3/2黒褐色～10YR4/1褐灰色砂質土
①b10YR3/2黒褐色～10YR4/1褐灰色砂質土
（酸化鉄・マンガンの沈着著しい）
①c10YR2/1黒色砂質土
②7.5Y4/1灰色砂質土
②b5Y4/1灰色砂質土
③2.5Y7/2灰黄色砂質土
（2.5Y7/3浅黄色～2.5Y6/3にぶい黄色シルト斑状混入）
③b10YR6/6明黄褐色粗砂
④2.5Y5/2灰黄色粗砂
⑤10YR4/1褐灰色砂質土（暗渠による攪乱堆積土）
⑥2.5Y5/4黄褐色粗砂（暗渠による攪乱堆積土）

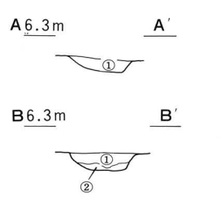
SD-02・03土層セクション



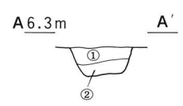


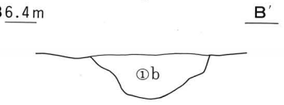


SD－１６土層セクション
①10YR3/2黒褐色～10YR4/2灰黄褐色砂質土
②2.5Y3/1～10YR3/2黒褐色砂質土
③2.5YR3/1黒褐色砂質土（②層よりシルト質）
④10YR5/1黄灰色～10YR4/2灰黄色砂質土
（溝肩部崩落堆積土、2.5Y5/2暗灰黄色砂5～10%混入）



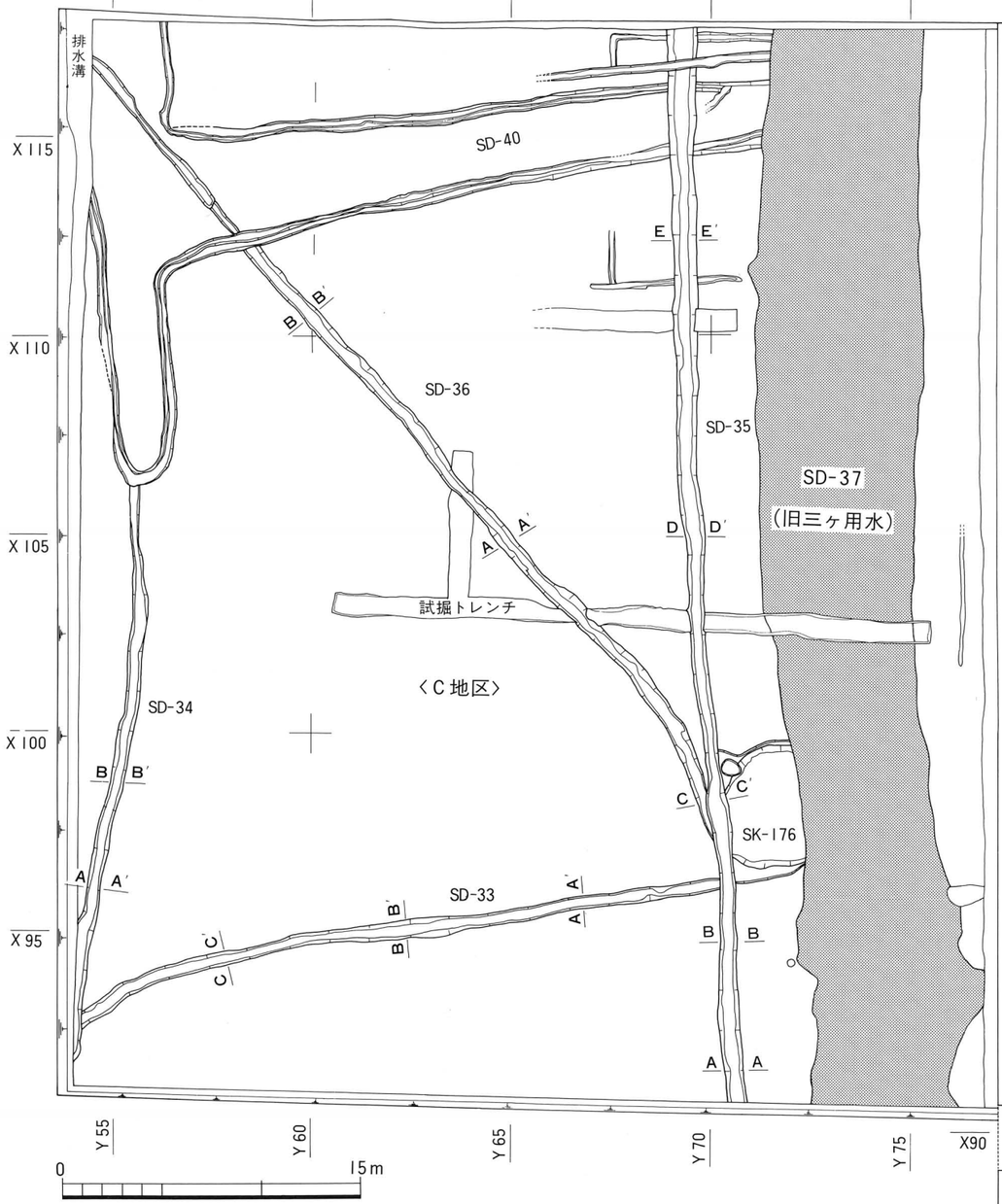
SD－１０土層セクション
①10YR6/2～10YR4/2灰黄褐色砂質土
②5Y8/1～5Y8/2灰白色砂質土

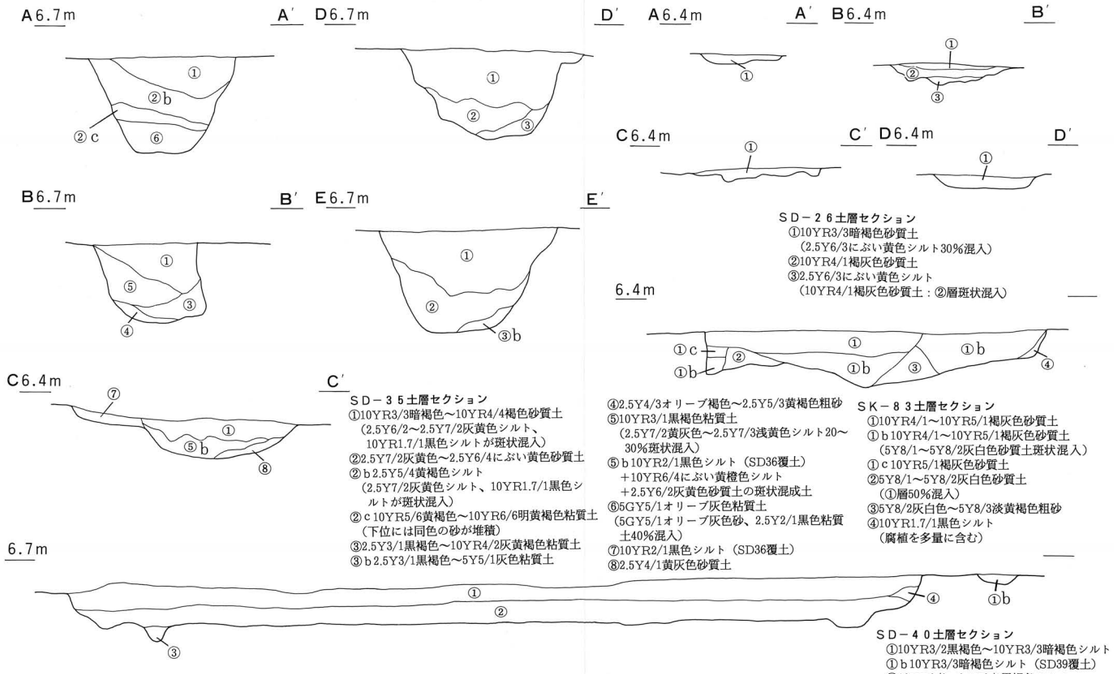




SD－０８土層セクション
①10YR3/2黒褐色砂質土
①b10YR4/1褐灰色砂質土
②10YR6/3～10YR6/4にぶい黄橙色シルト
（10YR1.7/1黒色シルト30～40%混入）

第３図　遺構配置図（１／300）・遺構断面図（１／40）



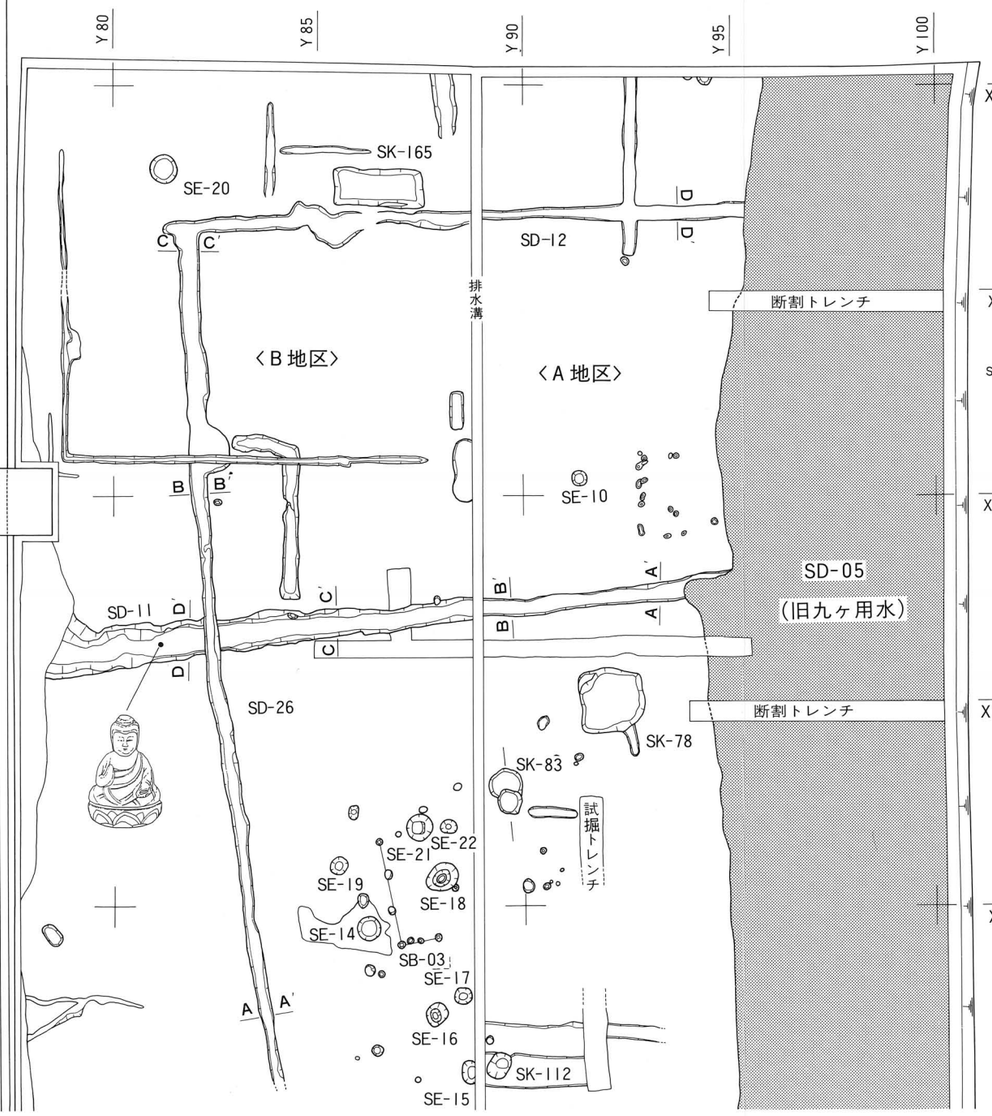


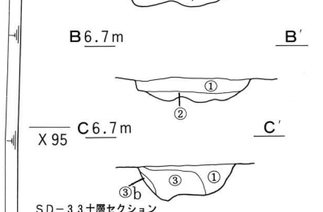
SD－26土層セクション
①10YR3/3暗褐色砂質土
(2.5Y6/3にぶい黄色シルト30%混入)
②10YR4/1褐灰色砂質土
③2.5Y6/3にぶい黄色シルト
(10YR4/1褐灰色砂質土：②層斑状混入)

SD－35土層セクション
①10YR3/3暗褐色～10YR4/4褐色砂質土
(2.5Y6/2～2.5Y7/2灰黄色シルト、
10YR1.7/1黒色シルトが斑状混入)
②2.5Y7/2灰黄色～2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
②b 2.5Y5/4黄褐色シルト
(2.5Y7/2灰黄色シルト、10YR1.7/1黒色シルトが斑状混入)
②c 10YR5/6黄褐色～10YR6/6明黄褐色粘質土
(下位には同色の砂が堆積)
③2.5Y3/1黒褐色～10YR4/2灰黄褐色粘質土
③b 2.5Y3/1黒褐色～5Y5/1灰色粘質土
④2.5Y4/3オリーブ褐色～2.5Y5/3黄褐色粗砂
⑤10YR3/1黒褐色粘質土
(2.5Y7/2黄灰色～2.5Y7/3浅黄色シルト20～30%斑状混入)
⑤b 10YR2/1黒色シルト（SD36覆土）
＋10YR6/4にぶい黄橙色シルト
＋2.5Y6/2灰黄色砂質土の斑状混成土
⑥5GY5/1オリーブ灰色粘質土
(5GY5/1オリーブ灰色砂、2.5Y2/1黒色粘質土40%混入)
⑦10YR2/1黒色シルト（SD36覆土）
⑧2.5Y4/1黄灰色砂質土

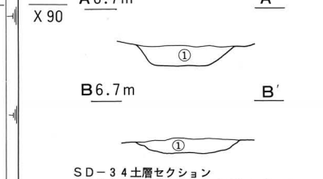
SK－83土層セクション
①10YR4/1～10YR5/1褐灰色砂質土
①b 10YR4/1～10YR5/1褐灰色砂質土
(5Y8/1～5Y8/2灰白色砂質土斑状混入)
①c 10YR5/1褐灰色砂質土
②5Y8/1～5Y8/2灰白色砂質土
(①層50%混入)
③5Y8/2灰白色～5Y8/3淡黄褐色粗砂
④10YR1.7/1黒色シルト
(腐植を多量に含む)

SD－40土層セクション
①10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト
①b 10YR3/3暗褐色シルト（SD39覆土）
②10YR2/2～2.5Y3/1黒褐色シルト
③10YR2/2～2.5Y3/1黒褐色シルト
(2.5Y7/2灰黄色シルト混入)
④10YR1.7/1黒色シルト（腐植泥炭層）
＋2.5Y7/2灰黄色シルトの混成層

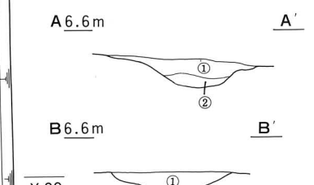




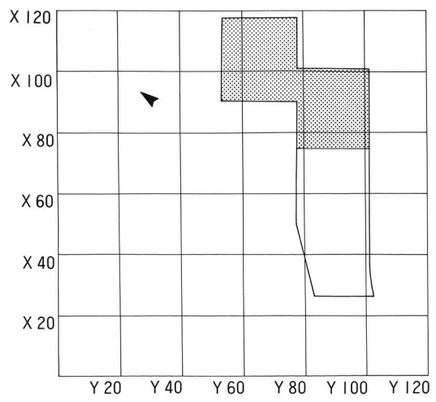
SD－33土層セクション
①10YR3/2～10YR3/3暗褐色砂質土
②2.5Y3/2黒褐色～2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
(①層と地山である5GY5/1オリーブ灰色シルトの混成層)
③6Y2/2～5Y3/2オリーブ黒色粘質土
③b 5Y2/2～5Y3/2オリーブ黒色粘質土
(③層に地山である5GY5/1オリーブ灰色シルトが縞状混入)

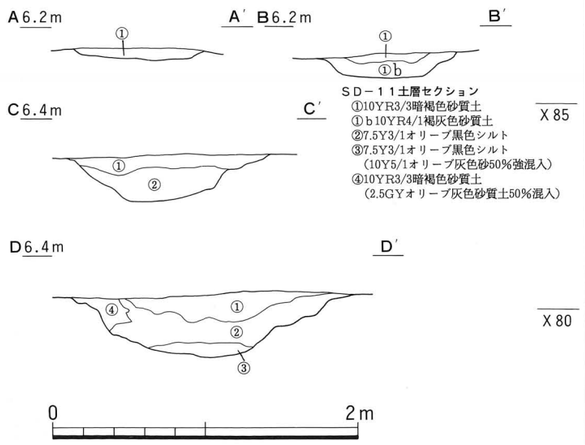


SD－34土層セクション
①10YR2/1黒色～10YR2/2黒褐色粘質土



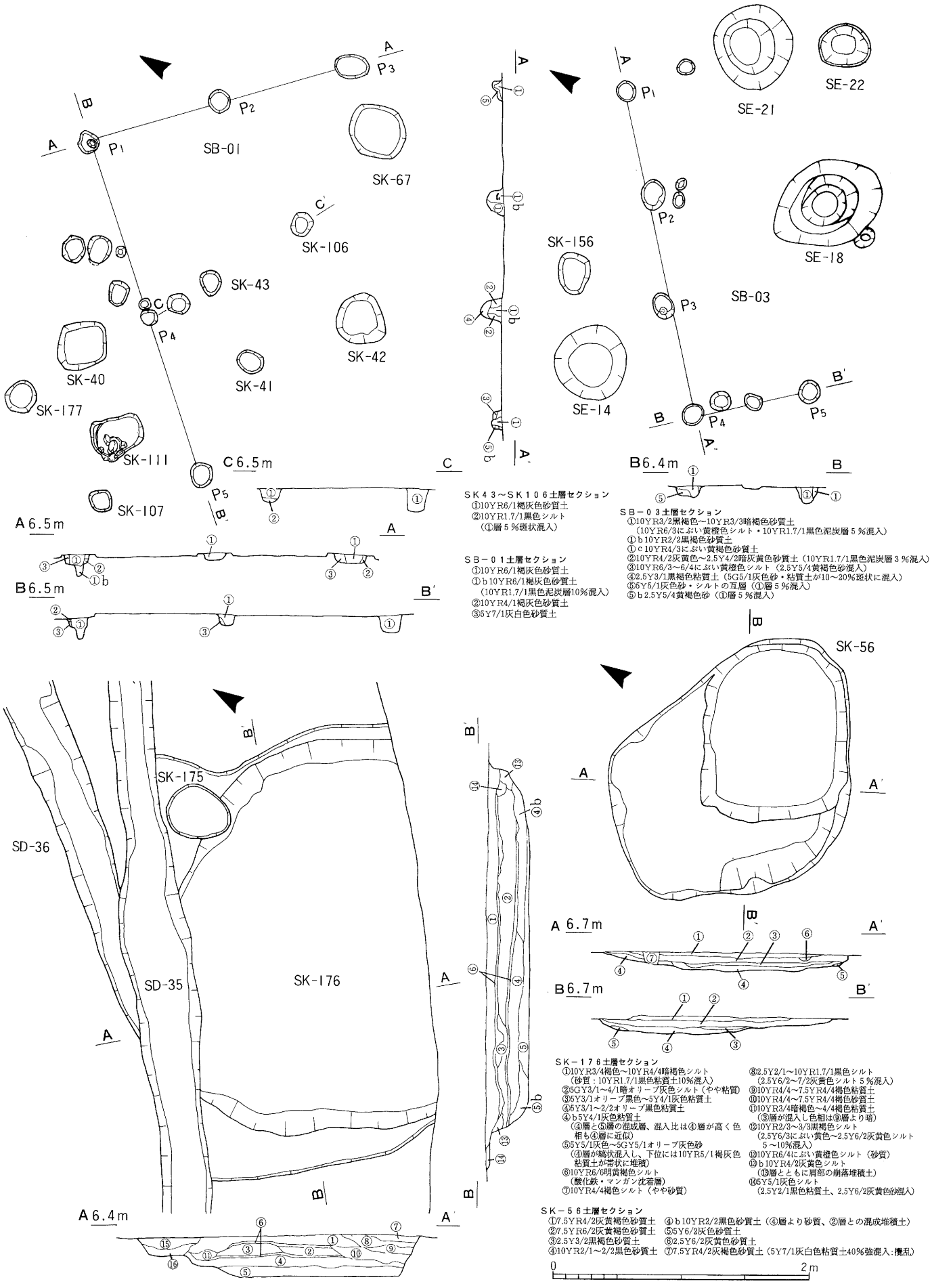
SD－36土層セクション
①10YR2/1～10YR2/1黒色シルト
②10YR4/2灰黄褐色シルト（やや粘質）





SD－11土層セクション
①10YR3/3暗褐色砂質土
①b 10YR4/1褐灰色砂質土
②7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
③7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
(10Y5/1オリーブ灰色砂50%強混入)
④10YR3/3暗褐色砂質土
(2.5GYオリーブ灰色砂質土50%混入)

第4図　遺構配置図（1／300）・遺構断面図（1／40）



SＫ４３～ＳＫ１０６土層セクション
①10YR6/1褐灰色砂質土
②10YR1.7/1黒色シルト
（①層５％斑状混入）

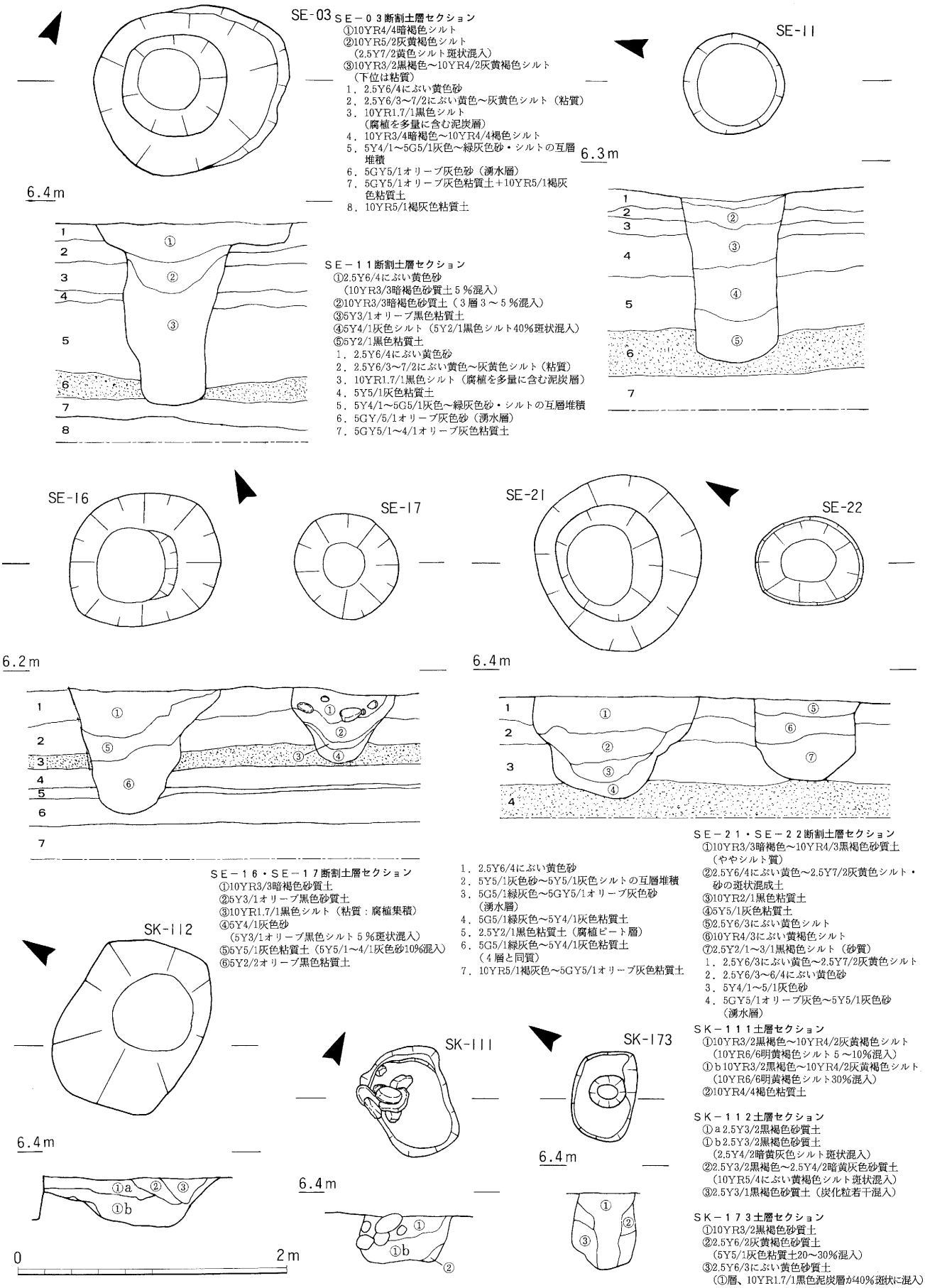
ＳＢ－０１土層セクション
①10YR6/1褐灰色砂質土
①b10YR6/1褐灰色砂質土
（10YR1.7/1黒色泥炭層10%混入）
②10YR4/1褐灰色砂質土
③5Y7/1灰白色砂質土

ＳＢ－０３土層セクション
①10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色砂質土
（10YR6/3にぶい黄橙色シルト・10YR1.7/1黒色泥炭層５％混入）
①b10YR2/2黒褐色砂質土
①c10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
②10YR4/2灰黄色～2.5Y4/2暗灰黄色砂質土（10YR1.7/1黒色泥炭層３％混入）
③10YR6/3～6/4にぶい黄橙色シルト（2.5Y5/4黄褐色砂混入）
④2.5Y3/1黒褐色粘質土（5G5/1灰色砂・粘質土が10～20%斑状に混入）
⑤5Y5/1灰色砂・シルトの互層（①層５％混入）
⑤b2.5Y5/4黄褐色砂（①層５％混入）

ＳＫ－１７６土層セクション
①10YR3/4褐色～10YR4/4暗褐色シルト
（砂質：10YR1.7/1黒色粘質土10%混入）
②5GY3/1～4/1暗オリーブ灰色シルト（やや粘質）
③5Y3/1オリーブ黒色～5Y4/1灰色粘質土
④5Y3/1～2/2オリーブ黒色粘質土
④b5Y4/1灰色粘質土
（④層と⑤層の混成層、混入比は④層が高く色相も④層に近似）
⑤5Y5/1灰色～5GY5/1オリーブ灰色砂
（④層が縞状混入し、下位には10YR5/1褐灰色粘質土が帯状に堆積）
⑥10YR6/6明黄褐色シルト
（酸化鉄・マンガン沈着層）
⑦10YR4/4褐色シルト（やや砂質）
⑧2.5Y2/1～10YR1.7/1黒色シルト
（2.5Y6/2～7/2灰黄色シルト５％混入）
⑨10YR4/4～7.5YR4/4褐色粘質土
⑩10YR4/4～7.5YR4/4褐色砂質土
⑪10YR3/4暗褐色～4/4褐色粘質土
（③層が混入し色相は⑨層より暗）
⑫10YR2/3～3/3黒褐色シルト
（2.5Y6/3にぶい黄色～2.5Y6/2灰黄色シルト５～10%混入）
⑬10YR6/4にぶい黄橙色シルト（砂質）
⑭b10YR4/2灰黄色シルト
（⑬層とともに肩部の崩落堆積土）
⑮5Y5/1灰色シルト
（2.5Y2/1黒色粘質土、2.5Y6/2灰黄色砂混入）

ＳＫ－５６土層セクション
①7.5YR4/2灰黄褐色砂質土　④b10YR2/2黒色砂質土（④層より砂質、②層との混成堆積土）
⑦7.5YR6/2灰黄褐色砂質土　⑤5Y6/2灰色砂質土
②2.5Y3/2黒褐色砂質土　⑥2.5Y6/2灰黄色砂質土
④10YR2/1～2/2黒色砂質土　⑦7.5YR4/2灰褐色砂質土（5Y7/1灰白色粘質土40%強混入：攪乱）

第５図　遺構実測図（Ｓ＝１／80）



SE－03断割土層セクション
①10YR4/4暗褐色シルト
②10YR5/2灰黄褐色シルト
（2.5Y7/2黄色シルト斑状混入）
③10YR3/2黒褐色～10YR4/2灰黄褐色シルト
（下位は粘質）
1．2.5Y6/4にぶい黄色砂
2．2.5Y6/3～7/2にぶい黄色～灰黄色シルト（粘質）
3．10YR1.7/1黒色シルト
（腐植を多量に含む泥炭層）
4．10YR3/4暗褐色～10YR4/4褐色シルト
5．5Y4/1～5G5/1灰色～緑灰色砂・シルトの互層堆積
6．5GY5/1オリーブ灰色砂（湧水層）
7．5GY5/1オリーブ灰色粘質土＋10YR5/1褐灰色粘質土
8．10YR5/1褐灰色粘質土

SE－11断割土層セクション
①2.5Y6/4にぶい黄色砂
（10YR3/3暗褐色砂質土5％混入）
②10YR3/3暗褐色砂質土（3層3～5％混入）
③5Y3/1オリーブ黒色粘質土
④5Y4/1灰色シルト（5Y2/1黒色シルト40%斑状混入）
⑤5Y2/1黒色粘質土
1．2.5Y6/4にぶい黄色砂
2．2.5Y6/3～7/2にぶい黄色～灰黄色シルト（粘質）
3．10YR1.7/1黒色シルト（腐植を多量に含む泥炭層）
4．5Y5/1灰色粘質土
5．5Y4/1～5G5/1灰色～緑灰色砂・シルトの互層堆積
6．5GY/5/1オリーブ灰色砂（湧水層）
7．5GY5/1～4/1オリーブ灰色粘質土

SE－16・SE－17断割土層セクション
①10YR3/3暗褐色砂質土
②5Y3/1オリーブ黒色砂質土
③10YR1.7/1黒色シルト（粘質：腐植集積）
④5Y4/1灰色砂
（5Y3/1オリーブ黒色シルト5％斑状混入）
⑤5Y5/1灰色粘質土（5Y5/1～4/1灰色砂10%混入）
⑥5Y2/2オリーブ黒色粘質土

1．2.5Y6/4にぶい黄色砂
2．5Y5/1灰色砂～5Y5/1灰色シルトの互層堆積
3．5G5/1緑灰色～5GY5/1オリーブ灰色砂
（湧水層）
4．5G5/1緑灰色～5Y4/1灰色粘質土
5．2.5Y2/1黒色粘質土（腐植ピート層）
6．5G5/1緑灰色～5Y4/1灰色粘質土
（4層と同質）
7．10YR5/1褐灰色～5GY5/1オリーブ灰色粘質土

SE－21・SE－22断割土層セクション
①10YR3/3暗褐色～10YR4/3黒褐色砂質土
（ややシルト質）
②2.5Y6/4にぶい黄色～2.5Y7/2灰黄色シルト・砂の斑状混成土
③10YR2/1黒色粘質土
④5Y5/1灰色粘質土
⑤2.5Y6/3にぶい黄色シルト
⑥10YR4/3にぶい黄褐色シルト
⑦2.5Y2/1～3/1黒褐色シルト（砂質）
1．2.5Y6/3にぶい黄色～2.5Y7/2灰黄色シルト
2．2.5Y6/3～6/4にぶい黄色砂
3．5Y4/1～5/1灰色砂
4．5GY5/1オリーブ灰色～5Y5/1灰色砂
（湧水層）

SK－111土層セクション
①10YR3/2黒褐色～10YR4/2灰黄褐色シルト
（10YR6/6明黄褐色シルト5～10%混入）
①b10YR3/2黒褐色～10YR4/2灰黄褐色シルト
（10YR6/6明黄褐色シルト30%混入）
②10YR4/4褐色粘質土

SK－112土層セクション
①a2.5Y3/2黒褐色砂質土
①b2.5Y3/2黒褐色砂質土
（2.5Y4/2暗黄灰色シルト斑状混入）
②2.5Y3/2黒褐色～2.5Y4/2暗黄灰色砂質土
（10YR5/4にぶい黄褐色シルト斑状混入）
③2.5Y3/1黒褐色砂質土（炭化粒若干混入）

SK－173土層セクション
①10YR3/2黒褐色砂質土
②2.5Y6/2灰黄褐色砂質土
（5Y5/1灰色粘質土20～30%混入）
③2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
（①層、10YR1.7/1黒色泥炭層が40%斑状に混入）

第6図　遺構実測図（S＝1／40）

5　遺　物（第７・８図、写真図版４）

出土遺物には、弥生時代・古代・中世・近世のものが認められる。量的には、先述のとおり遺物包含層等の消失により、整理箱４箱程度と極めて少ない。なお、遺構群に伴うのは中世期の遺物であり、他は混入品である。

弥生時代（第７図１～６）いずれも弥生土器の甕・壺の小破片で、全容を知り得る個体は無い。１は口辺部が細長く伸び、幅広の複合口縁を持つ形態を呈する壺の口縁部片で、口径は15cmを測る。SD36から出土した。２は一般的なものよりやや外傾度が強いが、外面縦方向・内面横方向に施されたハケメ調整や口辺外面に施文された箆描文から、球形・長胴形の胴部に円筒状の口頸部が付く長頸壺類の口縁部片と思われる。SD01覆土上面に混入していた。６も壺あるいは甕の底部片で、底径８cmを測る。SD10より出土。これらの帰属時期は、弥生時代終末期と考えられる。

古　代（第７図７～11）須恵器杯蓋（８）・杯（９・10）・壺（11）・甕、土師器甕・椀（７）等が数点認められるが、小破片のため図示できたものは少ない。殆ど土抗・溝から出土したが、いずれも混入品で各遺構に伴うものではない。７は底径 4.6cmの土師器椀底部としたが、体部の外傾度から皿とも考えられる。９・10は低短な高台が付く有台のいわゆる杯Ｂである。それぞれ底径7.2cm・9.0cmを測るが、上部を欠き法量など詳細は不明。８は杯Ｂに付属する蓋である。口径12.8cm。11は長頸壺の胴部片である。杯類の形態的特徴から９世紀後半代の所産と考えられる。

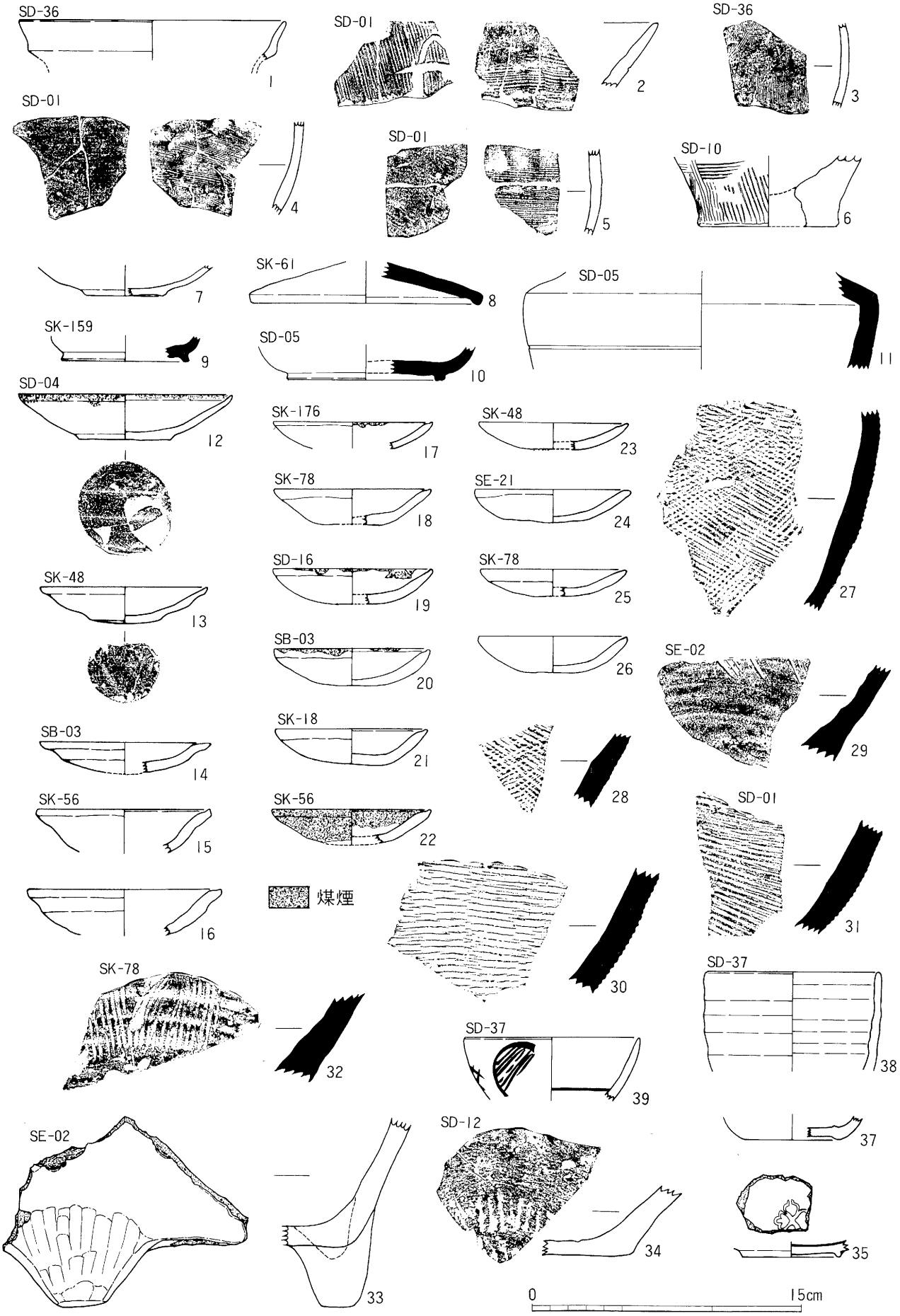
中　世（第７図12～35・第８図36）中世土師器皿（12～26）、珠洲（27～32）、瓷器系陶器（34）・瓦器（33）、青磁、瀬戸美濃（35）、鋳胴製の懸仏（36）の他、SE07から出土した木製品（曲物残欠）がある。

中世土師器皿は、成形手法によってＡ類：ロクロ成形（12・13）とＢ類：非ロクロ成形（14～26）に区分できる。Ｂ類はさらに、口縁部等の形態から細分でき、１類：体部はやや外反して緩く立ち上がり、外面をやや強めにナデ調整するもの（14～16）、２類：体部が緩く内湾して立ち上がり、口縁端部を摘み上げるようにナデ調整するもの（17～22）、３類：体部が緩く外傾して立ち上がるもの（23～26）の概ね３類に区分できる。Ａ類は２点のみ出土した。口径12cm（12）と9.5cm（13）の２法量が認められる。いずれも底部は糸切り後に横方向にナデ調整される。Ｂ１類は口径9.8cm（14・15）と11cm（16）と法量的に他類よりやや大型である。口縁端部の仕上げも平坦に収める14、摘み上げる15・16と違いが認められる。Ｂ２類は口径8.8～9.0cmの１法量のみである。21には内面に指頭大の布状圧痕が３点残る。Ｂ３類も同様に口径8.2～8.9cmの１法量のみ認められた。いずれも形態や成形・調整手法の特徴から15世紀後半～16世紀前半代に帰属するものと考えられる。以上、26以外は遺構覆土からの出土である。

珠洲には甕（27～31）・片口鉢（32）の胴部片がある。全容が不明なことから判然としないが、32のおろし目や外面のタタキ圧痕の状態から珠洲編年第Ⅵ期に帰属するものと思われる。33は瓦器の火鉢底部片で、内部を中空にした逆台形状の脚が付き、脚部外面は磨き調整されている。SE02からの出土。34は瓷器系陶器の擂鉢底部片である。使用痕が明瞭で、おろし目がかなりすり減っている。越前系と捉えたが、施釉痕跡は無く色調もにぶい黄橙色を呈することから釈然としない。35は瀬戸美濃の灰釉丸皿で、見込みに印花が押捺される。16世紀中頃と考えられる。

36の懸仏尊像は、今回の調査で最も注目される出土遺物である。区画溝の可能性が高いSD11底面位から、鏡板を消失した状態で出土した。尊像は鋳銅製の座像で、像高4.95cm、幅3.3cm、重さ30ｇを測る。胴部には鍍金の痕跡を留めている。胸部背面に鏡板と接合するための柄を鋳出し、先端を欠損するものの、楔穴がある。このことから、当懸仏は尊像と鏡板を別々に製造して装着したものであることが明らかである。眼・口・経衣襞・蓮華座が線刻で表現されているが、往時の使用によってか頭・顔部は摩耗が著しく肉眼では表情が不鮮明である。造形は曖昧で判然としないが、右手は施無畏印を結び、左手には薬壺を持つ姿を表現していると思われ、薬師如来像と推定される。

近　世（第７図37～39）越中瀬戸、伊万里等の小破片が数点ある。37は越中瀬戸の丸皿である。17世紀前半代とみられる。38も同じく越中瀬戸の筒形椀で口径10cm。ともに17世紀前半代のものとみられる。39は伊万里の染付椀である。口径10cmで体部に丸文を描く。18世紀後半代の所産と考えられる。（島田）



第7図　遺物実測図（S＝1／3）※遺構番号表記のないものは、表土ないし包含層からの出土

Ⅳ　まとめ

まず、SD11から出土した懸仏について補足した後に、これまで述べた調査概要を踏まえた上で、若干の所見を加えて今年度調査のまとめにかえる。

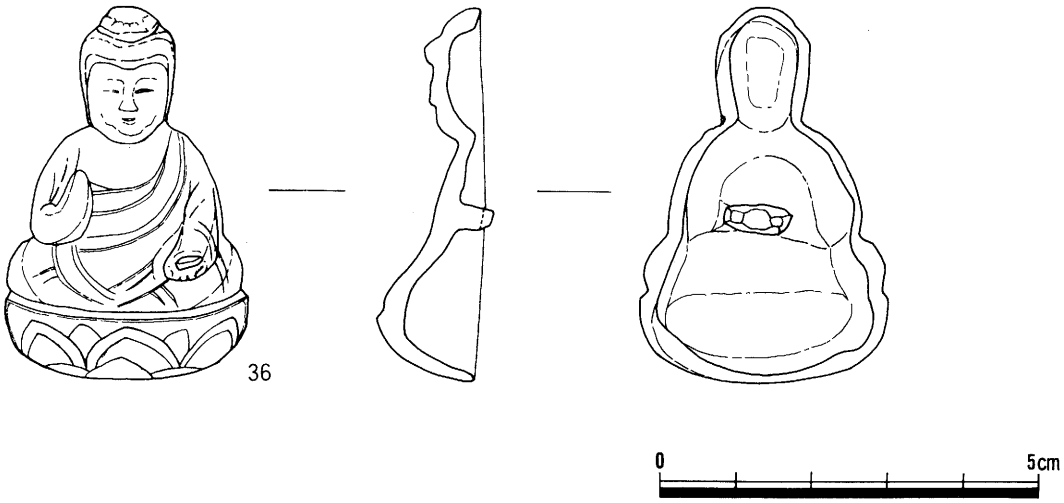
1　懸仏について

そもそも「懸仏」という名称は、その吊り懸けられる形から明治時代以降につけられたもので、本来は「御正体（みしょうたい）」と呼ばれ、鏡の中に仏像や神像などをあらわして、仏堂や社殿に吊り懸けて礼拝の対象とされたものである。その初現は平安時代前半に遡り、天台系密教の教理によってうちたてられた神仏習合、すなわち本地垂迹説（ほんちすいじゃくせつ）の思想の定着とともに盛行するものとなった。創始段階のものは、古くから御神体として神社に祀られていた鏡の鏡面に仏像や神像を朱墨で描いたり、線刻して表出するもので「鏡像（きょうぞう）」と呼称される。その後、次第に鏡板に半肉彫りや鋳胴製の尊像を貼り付け、吊懸金具を備える形へと推移して行く。この尊像を立体的に表現したものを「懸仏」と称する。

鎌倉時代以後、豪族や庶民の宗教活動が高まるにつれ、懸仏の製作が盛んとなり、一定の製作形式が整って行く。鏡に変わって銅製の円板に鍍金を施したものが主体となり、その表面に槌出しや鋲留めなどの手法によって半肉状のいわゆるレリーフで仏像を表出し、より精巧な表現を行うものへと発展する。さらに室町時代前半にはその製作技術は完成段階を迎える。尊像は円板とは別に製作され、厚手の鋳・鍛造品を柄・楔で円板と接合する手法が用いられ、より立体的で写実的なものとなった。また珠文・花座を装飾したり、花瓶・圏を配置するようになる。

しかし、この頃を境にしてその製作技術は衰退し始め、尊像は省略・粗雑化へと向かう。尊像そのものが薄手になり、口・眼・経衣が線刻のみで表現されるようになり、また、木造や瓦造のものも製作される。そして室町時代後期から江戸時代にかけて、懸仏は広く普及し、村々の小さな祠や、家々の氏神にも祀られるようになり、尊像も観音菩薩・阿弥陀如来・薬師如来などの仏像以外に、八幡神や民間信仰の神々、その土地土着の神々などを懸仏のかたちで製作した鋳胴・鋳鉄製のものが多く見られるようになる。やがて明治に至り、維新政府によって発せられた神仏分離令のもと吹き荒れる廃仏毀釈のなかで、懸仏の多くは取り除かれ信仰の表舞台から姿を消して行くこととなった。

県内に残る鏡像・懸仏の実情は、これまで詳細な調査例が無いため判然としないものの、廃仏毀釈を免れ寺社などに伝世するものは相当数あるものと思われる。しかし、発掘調査によって地中から発見されたものは立山信仰に関連する芦峅寺室堂遺跡・虚空蔵窟などで出土した数点が知られているのみである。その意味でも、今回八塚Ｃ遺跡で出



第８図　遺物実測図（Ｓ＝１／１）

土した当懸仏は貴重な資料と言える。先述した製作手法や造形の変遷からこの懸仏の製作年代を推定すると、室町時代後半代（14世紀後半）の所産と考えられる。一方で、出土した中世土師器皿を基準として導かれる遺構の帰属年代は、15世紀後半～16世紀前半であり、百年余の時期差が認められる。このことから、当該懸仏は少なくともその間は調査区周辺に所在したと推定される仏堂・社殿あるいは祠等に祀られ伝世していたと考えることができる。

2　調査の所見

調査当初は、地元に残る伝承や試掘調査結果から、中世後期に所在したとされる寺社に関わる遺構・遺物の発見が期待されたが、今回の調査対象地が遺跡範囲の外縁部に当たることに加え、予測以上に後世の攪乱の影響が著しく遺構・遺物ともに遺存状況が不良であったため、当遺跡の性格を解明するまでには至らなかった。

しかし、積極的に評価すれば、先述した懸仏の出土は周辺に何らかの宗教施設が存在したことを裏付ける根拠のひとつであり、また、井戸に投棄されていた瓦器製の火鉢を仏具の火舎と見なせば、その可能性はより高まる。さらに、その存在を肯定した場合、懸仏が出土したSD11やSD35などは区画溝と考えられる状況にあることから、これらの溝はその境内域を区画するものと考えることができよう。

また、検出された建物・井戸なども、出土した中世土師器皿の年代から15世紀後半～16世紀前半代に営まれたと捉えることができる。その宗教施設とどのように関わるものか明らかではないが、偶然にもかつて当地に所在した寺社跡が上杉謙信の兵火で消失したとの伝承を裏付けるが如く時期的に合致するため、非常に興味深い結果となった。

試掘調査結果では、次年度の調査予定地となる事業計画地北東端部域に、今年度調査区とは様相を異にする遺構密度が濃密な一帯があることが判明している。今後、その区域の調査が進めば当遺跡の性格・内容を解明する大きな手がかりを得るものと思われる。よって、次年度の調査成果をもって改めて検討を加えたい。　（島田）

引用・参考文献

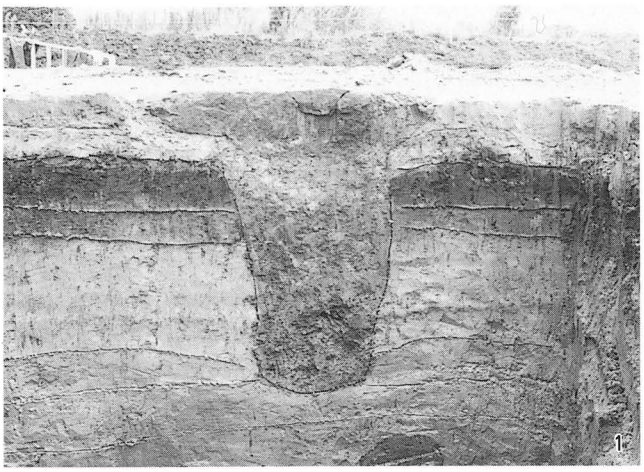
イ　池野正男　1987「Ⅲ 調査概要 1 辻遺跡（5）弥生・古墳時代の遺物」『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
　　立山町教育委員会
　石川県立歴史博物館　1987『懸仏への祈り』
　岩手県立博物館　1983『岩手の懸仏』
ウ　上野　章・押川恵子　1991『井口城跡』井口村教育委員会
エ　越前慎子　1996「第Ⅱ章 遺物　2出土遺物 C中近世の土器・陶磁器」
　　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
オ　大島町　1989『大島町史』大島町教育委員会編
　大島町教育委員会　1991『富山県大島町荒畑遺跡発掘調査概要』大島町教育委員会
カ　河西健二　1994「Ⅷ研究レポート 5竪穴状土坑」『埋蔵文化財年報（5）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
サ　笹間良彦　1992『資料・日本歴史図録』柏書房株式会社
シ　下平博行　1988「第Ⅳ章 遺物　第1節 仏像及び仏具」『白山山頂学術調査報告』國學院大學考古学資料館 白山山頂学術調査団
タ　立山町教育委員会　1994『芦峅寺室堂遺跡－立山信仰の考古学的研究－』
ト　東京国立博物館　1990「鏡像と懸仏」『日本の美術』第284号
　富山県教育委員会　1970『立山文化遺跡調査報告書』
　富山県　1984『土地分類基本調査　富山』富山県農地林務部ほ場整備課編
　富山県立山博物館　1994『立山信仰－祈りと願い』
ホ　北陸中世土器研究会　1988『北陸中世土器・陶磁器・漆器』
　北陸中世土器研究会　1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
　北陸中世土器研究会　1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』
ユ　湯尻修平　1988「第6章 第3次調査の遺物・第7章まとめ」『白江梯川遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
ヨ　吉岡康暢　1994「第二章 珠洲系陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』

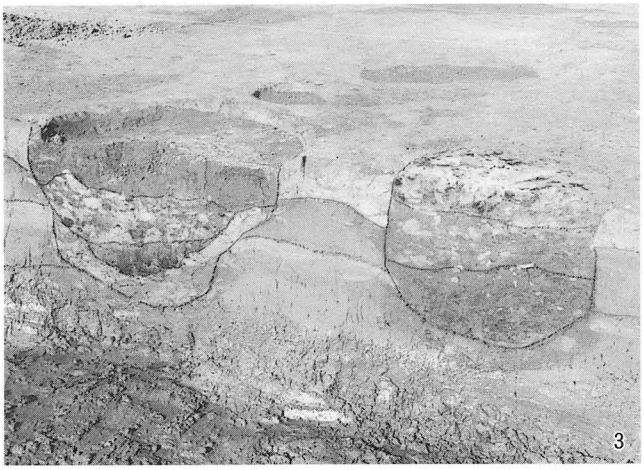
1．調査区全景（A地区：北東より）

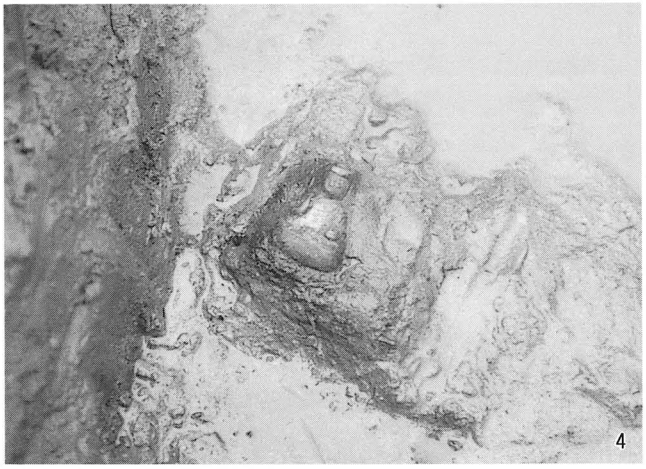
2．調査区全景（B地区：北東より）

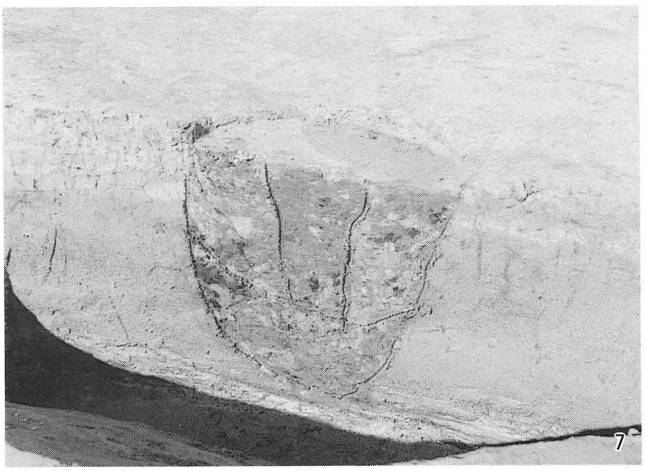
1．調査区全景（C地区：北東より）

2．SB－01（北より）

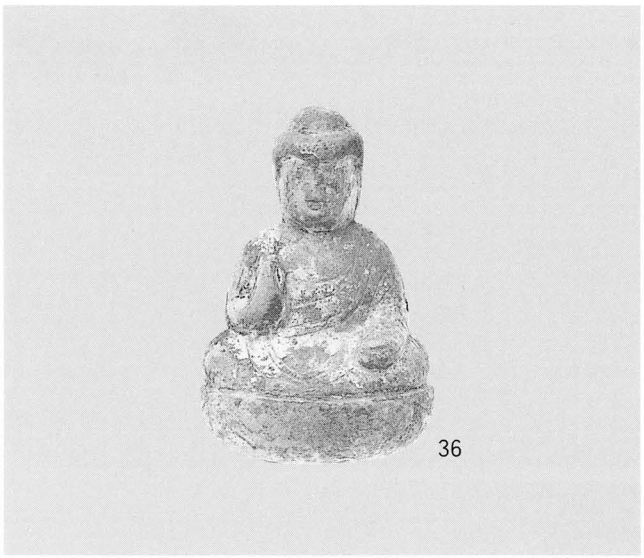


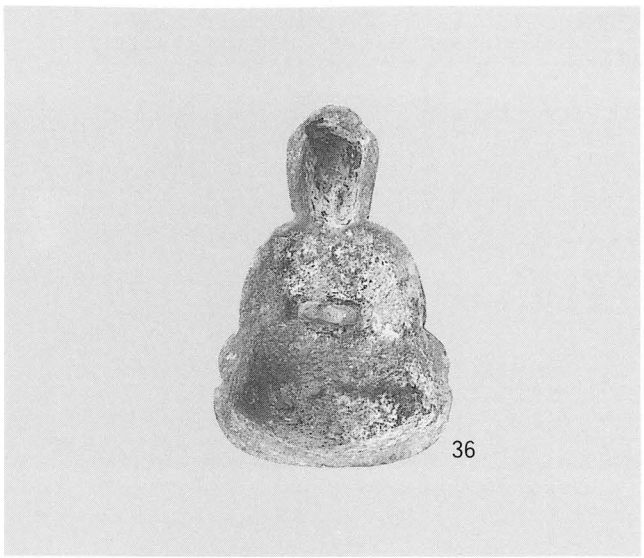


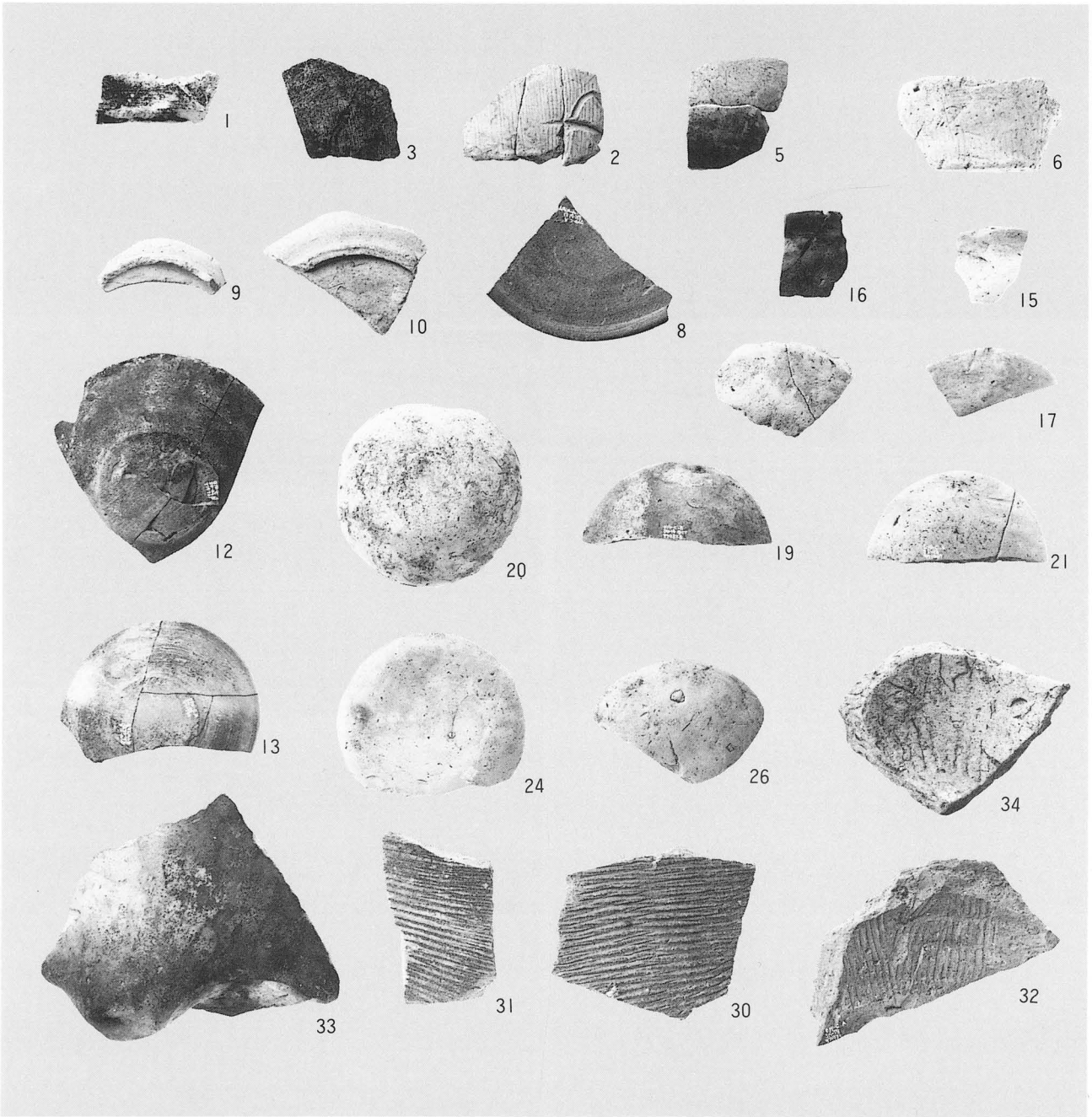




1．SE－03　2．SE－19　3．SE－21・22　4．懸仏出土状況
5．SB－03：P－3　6．SK－152　7．SB－03：P－2　8．SD－35：D－D′セクション







出　土　遺　物

報告書抄録

ふりがな	やつづかCいせき
書名	八塚C遺跡
副書名	民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告
編集者名	島田修一・田中　明・大友喜代子
編集機関	富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0115　富山県富山市茶屋町206-3　　TEL. 0764-34-2814
発行機関	大島町教育委員会
所在地	〒939-0274　富山県射水郡大島町小島703　　TEL. 0766-52-3854
発行年月日	西暦１９９８年８月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
八塚C遺跡	富山県射水郡 大島町八塚 507番地外	16384	016	36° 30′ 10″	136° 59′ 10″	19970603～ 19971204	10,500	民間宅地造成事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八塚C遺跡	集落	弥生時代		弥生土器	昭和初期の削土により攪乱が著しいものの、地元伝承を裏付けるようなかたちで宗教施設に関わると推定される鋳銅製の懸仏が区画溝内より出土した。
		平安時代		土師器、須恵器	
		室町時代	掘立柱建物 土坑、井戸 溝・用水	中世土師器、珠洲、越前、青磁、瓦器、鋳銅製懸仏	
		江戸時代以降	溝・用水跡	越中瀬戸、伊万里、	

富山県大島町

八塚C遺跡

－民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告－

平成10年８月発行

編　集　富山県埋蔵文化財センター
〒930-0115　富山市茶屋町206-3
TEL　0764-34-2814

発　行　大島町教育委員会
〒939-0274　射水郡大島町小島703
TEL　0766-52-3854

印刷所　日興印刷株式会社